

みの生活なのに今もってまもなく少なく、ソ連の貧困さをつくづく推察する。

昭和二十三年七月中旬、ナホトカに集結する。

同年七月二十四日、ついに舞鶴へ上陸することができた。二度と祖国へ帰れるかどうか分らない抑留生活三年間の苦しみ。緑美しい山々は神の国のように光り輝いていた。

昭和二十三年七月二十八日、祖母らの待っている丹波へ帰った。

### 三度死線を越えて

#### 迎える七十七歳

兵庫県 金川 浜治

私は、昭和十六年十二月八日、日米開戦の当日、村役場より神戸対空監視所天神分所へ、午後六時より勤務せよとの命を受け、以来、昭和十七年八月まで二週間に一回二十四時間勤務で対空監視所勤務をいたし、

八月十五日、中部五十二部隊（岡山工兵隊）に入隊いたしました。所属は第二中隊（出羽隊）でした。

岡山工兵隊で三カ月間軍隊の基礎教育を受け、十一月下旬満州一八九三部隊（独立工兵十八連隊）に駆兵要員として転属を命ぜられ、目標ハルビンへ、前へ進めの号令で兵舎を後に下関へ、そして美しい日本国と別れて玄海灘を無事に釜山に上陸、朝鮮半島を北上してハルビン兵舎に着きました。岡山の木造兵舎と違って煉瓦造りの立派な建物でしたので、皆この兵舎での軍隊生活を楽しみに入舎いたしましたところ、部隊は満州佳木斯に移転した後です。

早速、翌朝佳木斯に向かって追従いたし、夕方佳木斯駅に到着。駅より行軍にて部隊に向かって出発いたしました。歩けど歩けどなかなか兵舎には到着いたしません。聞けば約二十キロほどとのこと、五時間ほど歩いてやっと兵舎に到着、全員くたくたになって就寝。翌朝練兵場に集合して入隊式、続いて編制が行われ、私は第二大隊第五中隊（武藤隊）に本科兵として所属することになりました。三年間以来、五中隊へ入隊

した二十七名の戦友が次々と各所へ転属いたしました。私は最後まで五中隊に残った五名の中の一人です。

一八九三部隊での行動は、まず入隊後間もなく十二月初旬中支蚌埠へ、作戦警備と重交通、渡河、架橋、漕舟、機甲、演習参加をはじめとして、陽崗の道路構築、夏期特別大演習、本隊において衛兵勤務要員、第二回目の中支蚌埠警備と演習。このとき、私が忘れられない出来事が起きました。それは佳木斯より中支に向かつて列車輸送中、北支白馬山において列車事故突発。三両目（前より）の貨車に乗っていた我が五中隊、入口曹長以下五十余名の死亡と五十六名の負傷者が出たことです。私はこのとき、設営のため約二週間ほど前に先発しておりました関係で命拾いをしました。

昭和十九年原隊復帰後初年兵教育助手。

東安の陣地構築、伊春の伐採作業、二十年の初年兵教育、林口移転。ムーロンにての陣地構築作業中八月九日、久しぶりの外出を楽しみにしておりましたところ、ソ連開戦により、直ちに戦闘態勢に入りましたが、ソ連軍の多量の兵器にはどうすることもできず、牡丹

江目標に後退を始めました。途中忘れることができない、八月十五日、山頂より降りて午前八時ごろ川辺で朝食を済ませ休憩中、見張兵の敵襲の声と共に敵弾が飛んできました。早速中隊長より各分隊に命令が出され、私は二分隊長代理として（分隊長は決死隊参加のため）、敵面左側方へ散兵してその指揮を執りました。敵との対戦状態約六時間、午後二時ごろに中隊長より全員集合の命により我が分隊は無事故で集合しました。

この戦闘で正面第一分隊は川端伍長以下十五、六名、全員が戦死されました。私はこの戦闘で二回目の命拾いをしたのです。川端伍長以下十五、六名の戦友を残して再び山頂へ登り、休息して、以来一週間、山頂、平野と牡丹江を目標に行軍を続け、八月二十二日寧安より少し離れた平野で朝食を済ませて休憩中、乗馬の将校が三名ほど白旗を立てて来られ、「どこの部隊か」と尋ねられたので、中隊長が「一八九三部隊」と申されると、その将校が「部隊長は一二四師団本部と行動を共にしておられる、もうすぐ来られるから待ってい

なさい」と申され、そのとき、生まれて初めて無条件降伏、停戦協定完了という言葉を聞きました。

白旗を持った軍使が通り約一時間ほどしますと、二四師団本部が到着し最後尾に部隊長が来られ、中隊長が報告されますと、この部隊の後尾に続けとの命にて出発しました。約五キロほど行軍した所で前方より「ソ連兵が時計を奪うぞ、皆奪われないようにせよ」との伝言があった。私は時計を奪われてしまいました。それから間もなく、銃は、軍刀はと、それぞれ各品目別に武装解除されました。場所は寧安市外だと思いません。

その後、「ダワイダワイ」で行軍して着いた所は東京城だと思いますが、そこで大隊編成をして、東京ダモイだと貨車に乗せられました。着いた所がシベリアのコムモリスク第一分所、作業大隊は二七三大隊第一中隊でした。貨車輸送中、九月中旬ごろ東京ダモイを聞きながら列車内で病死した初年兵田中一等兵（十九年入隊）を北満の土地で、中隊長と私と同地出身の初年兵と三人で上葬してまいりましたが、終生忘れる

ことができません。

食事です、黒パンとトウモロコシ粉、高粱、燕麦、粟、大豆、鶏豆、馬糧高粱等の水粥と塩魚のスープでした。日本では黒パンを除いた物は皆牛馬の飼料ばかりで、しかも腹四分目ぐらいます。また、舎内は電灯が無く、ロソクです。便所は兵舎より百メートルほど離れておりましたので、夜何回も小用に行くため、十分には眠れません。このような生活の中で昼は最初は宮内建物の補修作業をし、私は農家出身ですから、大工、左官の手伝い作業に従事しました。

昭和二十年十一月ごろにハバロフスクより日本新聞なるものが発行され、十人に一部回覧するように配られました。一面に日本の政治機構は天皇制軍閥官僚であるがため、我々がこのように抑留されることになった。我々は抑留中に十分勉強して天皇制を打倒いたさねばならないということが書いてありました。また、間もなく收容所にも壁新聞がはられるようになり、今まで何々殿と言っていたのが何々さんと言うようになり、軍隊の階級章も皆取り捨てました。そうしている

うちに所内の補修作業も終わり、それぞれと配置替えが行われ、私は収容所から五キロほど離れた所にある煉瓦工場の粘土掘り作業に配属されました。粘土を掘ってトロッコに積む重労働です。

昭和二十一年三月軍隊当時七十キロありました体重が栄養失調で四十キロになり、作業ができないため、医務室へ行き、医師に診察していただきましたところ、直ちに入院と診断されて同敷地内の第一病院に入院いたしました。約一カ月で退院となり、健康回復のため、病院の軽作業員となって約五カ月間病院の入浴当番を初め、死体埋葬、農場の馬鈴薯掘りなどの作業に従事して、九月ごろ原隊に帰り、炊事場勤務となり、寒い間を過ごして、二十二年四月ごろより市街の住宅建設作業に従事しました。

そして九月中旬ごろ東京ダモイで貨車に乗せられ、ナホトカに着きましところ、ナホトカ輸送業務要員の交代を命ぜられ二十三年五月まで作業係として勤務し、二十三年度の第一便にて舞鶴に上陸した次第です。

昭和二十一年三月、栄養失調で四十キロの骨と皮の

体になったときは、今まで二度命拾いしたので今度こそは駄目かと心で覚悟しておりましたが、お陰で三日の命拾いをさせていただきました。これも御先祖様が我が家にとって私を必要とされたのでお守りくださったと思ひ、毎日感謝の日々を五十年余過ごしてまいりました。来年は七十七歳を迎えることになりましたが、もう一つ忘れることができないのは入院中、死体となって埋葬した多くの戦友たちは現在、十分に弔っていただいているだろうか、と非常に気掛かりでなりません。

### シベリア抑留記

兵庫県 石田 寿

生年月日 大正十一年七月八日生

入隊 昭和十八年一月十日、部隊名 姫路第五一部隊  
(砲兵)

昭和十八年満州に渡る。部隊は満州第三三〇部隊の二番砲手になる。